囲炉裏

佐賀　彩美（さが　あやみ）
アイヌ語地名研究会

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モントレー国際大学院（現ミドルベリー国際大学院モントレー校）通訳翻訳学科修士課程修了。全国通訳案内士。

囲炉裏、アイヌ語ではアペソ（ape－火 so－床）またはアペソコツ（ape－火so－床 kot－窪み）はアイヌ民族の生活の中心でした。これは炉の部分です。火の女神、アペフチカムイ（ape－火の huci－媼 kamuy－神）の鎮座するところでもあるので囲炉裏全体はカムイミンタㇲ（kamuy－神の mintar－庭）と表現しました。日本の囲炉裏は四角形ですが、アイヌの人たちの囲炉裏はコの字型で、入口側の部分には炉縁はありません。これは流木などをそのまま薪として利用していたので、サイズの違う長い木でも炉で焚けるように工夫したためです。海辺の流木は海水の塩分を含んでいて、そのまま使うと煙が目を刺激するため、家の近くにニプ（ni－木 pu－倉）といい、木を寄せかけた保管場所を作り３か月から５か月も放置して雨で塩分を洗い流してから使いました。それでも、炉の煙のせいで目の疾患を患う人が多かったといいます。囲炉裏の枠となる木の据え方にも厳格なルールがありました。炉縁から見て一番奥の横向きの木は左端が根本、右端が梢側になるように、縦に置く木は上端が根本、下が梢側になるように置かれます。

囲炉裏は神様の庭ですから、アイヌの人々は、汚すと運が下がると考え、火事を防ぐためにも常に清掃を怠りませんでした。炉の灰のならし方も決まっていて、火の上手は戸口に立って左から右へ、火の両脇は、奥から手前に灰ならしで筋目をいれます。

火の神であるアペフチカムイは人間の願いを他の神々に取り次ぐ神様であり、人々の生活に最も深く関わっていました。願い事をするときは、人々はアペフチカムイにお目当ての神様に取り次いでくれるよう頼みました。囲炉裏の火の無数の火花はアペフチカムイの召使、パクサが伝令として願い事を数千、数万もの神様に一度に届けます。これは正しく神業です。火の神の情報伝達の素早さから、火の神の前で人や悪口を言うとすぐに伝わってしまうため、そのようなことは絶対に慎むべきとされていました。また羆猟や漁に出かける話をするのもタブーとされます。火の神の家来たちが羆や魚に告げ口をして事故が起きたりするからだそうです。このような話をするときは、目くばせをして外に出て、見通しの良い広場で腰を下ろし、声を潜めて話し合いました。

誰かが亡くなった場合もまず、アペフチカムイに報告します。すると、アペフチカムイの伝令が、亡くなった人のあの世の親族や神々にそのことを連絡します。また、森からサルノコシカケの大きなものを取ってきて、これに火をつけて屋外で燃やしますが、サルノコシカケは何時間も燃え続けるそうです。何のためかというと、暗闇でも訪れる神々や弔問に来る人々の目印になるからです。スイッチを入れれば電灯がつく現代の生活とは異なり、夜になれば真っ暗闇になることを想像してみてください。日本でもお通夜の間、蝋燭を絶やさないようにするのも根はこのような考えなのかもしれません。今でも海で人が行方不明になると、その人の霊魂が戻ってくるための目印になるようにと、浜辺で何日も流木などで焚火を燃やし続けるところもあります。また、葬儀で立てるアイヌ民族の墓標には、来世への道中を加護するためにあえて、火の消し炭で黒く色を付けました。亡くなった人がアペフチカムイの助けを得て、あの世に旅立つ準備をし、道案内をしてもらうためです。霊魂は、遺体から離れ近くにあるアフンパㇽ（ahun－入って行く par－（入り）口）という洞窟を通って川上へ向い、その地域で一番高い山の頂に導かれ、そこから来世の天界へと昇天します。

＊本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として（一社）北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。

藤村　久和　氏　北海学園大学名誉教授　北日本文化研究所代表　アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般（精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療（整体ほか）等）を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践している。また、アイヌ民俗文化財調査（北海道教育委員会）に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する。
主な著書：『アイヌの霊の世界』（小学館、1982年）、『アイヌ、神々と生きる人々』（福武書店、1985年）、『アイヌ学の夜明け』（梅原猛氏との共編、小学館、1990年）、『アイヌのごはん』（監修、デーリィマン社、2019年）、『平成20～令和４年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査１～14』（北海道教育委員会、2008～2023年）等。